

第3話

「中崎町」の問いかけ 何を残し何を生むのか

弘本 由香里

Written by Yukari Hiromoto

写真：太田順一

はじめに

優れた都市住宅として、他に類を見ないほど多様な発展を見せ、開発の波に洗われながら、現在もなお大阪の典型的な住まいとして、まちのあちこちに生き続けている大阪の長屋。近世に形成されたプランを受け継ぎながら、

き要素をふんだんに宿した存在なのではないか、そんな気づきが生まれつつある。その価値を再発見し、活かそうとする動きがあちこちで見られる。

こうした現象を通して、現代の都市問題・住宅問題にアプローチし、それを解く鍵を見

近代化による社会・生活の変革に対応し、文字通り都市住宅としてまちの活力を支えてきた歴史がある。

戦災によって、こうした長屋の多くが姿を消していった。しかし、かろうじて戦災を免れた地域に、今もなお多くの長屋が命をつないでいる。一見、戦後の都市開発から取り残されたかのように見えていた長屋街が、実は成熟社会における持続可能な都市の発展を支える仕組みや都市居住のモラルなど、学ぶべ



戦前からの路地と長屋の懐かしい風景が残るまちかど

つけることができないか。そこに住み・暮らす主体の側から、都市づくりのシステムを組みなおしていく都市再生の核心を、長屋再生ムーブメントに読み取ることができないか。本連載はそんな思いからスタートしたものである。

第一話では、長屋をめぐる考察の導入として、大阪の長屋における歴史の連続性と多様性に焦点を当て、その特性を大まかに外観した。続く第二話では、今なお長屋で構成された街区の姿をふんだんに残す、空堀商店街界隈での長屋再生の動きを取材し、持続的・内発的都市再生の鍵を探った。

第三話の今回は、大阪市の玄関口・梅田のすぐ側に位置しながら、戦前からの長屋を中心にした暮らしの風景が息づく中崎町界隈の長屋と、そこにやってくるニューカマーたちの姿を追いながら、そのムーブメントが問いかけてくる声に耳を傾けてみたい。

景観が物語る 中崎町の特徴

大阪・梅田の東側、茶屋町から新御堂筋・JR東海道線を越えたところに、中崎町と呼ばれる一帯がある。中崎西、中崎、万歳町界隈。梅田に隣接する地だけに、オフィスやマンション、倉庫や工場も多いが、何よりも特徴的なのは長屋の存在である。奇跡的に戦災を免れ、特に中崎西一丁目・四丁目、中崎三丁目界隈、半径二〇メートルほどのコンパクトなエリアには、戦前からの路地と長屋の懐かしい風景が濃密に残されている。高度に開発された梅田のわずか目と鼻の先だとは、にわかには信じ難いほどだ。

梅田の繁華街から、徒歩わずか十分ほど、



お地藏さんとともにゆっくりと時が流れる路地

JR東海道線の東側に足を踏み入れると、一転時代が変わったかのようにスローな空気漂うエリアが現れるのである。時のスピードを隔てる鉄道の高架は、まるで残されたまちを守る城壁のようにさえ見え、高架下のトンネルは、不思議の国への入り口とでもいうべき印象を宿す。暗闇を潜り抜けて道を進めば、やがて長屋が軒を連ねる町並みにたどり着く。振り返ると高架の向こう側に、ターミナルを取り巻く高層・超高層のビルのシルエツトが重なっている。時代の断層を見るかのような眺望が目飛び込んでくる。

江戸時代に遡ると、一帯は大坂三郷の外側の村域。明治に入って梅田に大阪駅ができた

後も、中崎町界隈はしばらく田畑の残るのどかなまちだった。やがて市街化の波とともに、畦道や運河がそのまま通りや路地に姿を変え、長屋のまちが広がっていった。そんな土地の歴史が、中崎町に特有の、迷路のような街路空間の下敷きになっている。

表通りの長屋には、箱軒をめぐらしたもので、や、タイル張りの壁を持つものなど、堂々とした昭和初期の様式を伝えるものが点在する。路地を入れば、ほのぼのと鉢植えの緑が並び、小ぶりな長屋が肩を寄せあうように並んでいる。長屋の居住者にはお年寄りが多く、まちかどのお地藏さんや銭湯が、暮らしの中に溶け込んでいる。都心にありながら、驚くほどゆっくりと一日が過ぎていくまちである。

レトロでスローなまちが 人を呼ぶ

実はこの数年、レトロでスローなこのまちへタイムスリップしてくるかのように、足を踏み入れる人が増えている。自分らしい表現の場・つながりの場を求めて、カフェやギャラリー、雑貨店やヘアサロン、オフィスや住まいなどを構える人が、後から後から集まってきているのだ。その多くが、長屋を改修して活用している。家主との交渉次第で、家賃も安く、年月を重ねて使い込まれてきた木や土の独特の温もりといい、改修の面白さといい、長屋は彼らの創造力を刺激し、思いを形



レトロなまちにタイムスリップしてくる若者たちが続々



緑溢れる路地の中にアートギャラリー「楽の虫」がある。彼方には梅田の超高層ビルが

にする格好の空間なのである。それぞれの夢を求めて中崎町にたどり着いた新たな住人たちは、戦前からの暮らしが凝縮された長屋のまちを舞台に、何を思い、どんな営みを繰り広げているのか。ニューカマーの動きを通して長屋の意味を考えてみたい。

中崎町ムーブメントの草分け的存在が、アートギャラリー「楽の虫」の宮久保忠広さんだ。宮久保さんは、一九九五年の阪神・淡路大震災で被災し、神戸から大阪へ避難。半年ほどの中崎町での仮住まいをきつかけに、長屋と路地のまちに潜在する可能性に気づいたという。そして、倉庫だった路地裏の長屋を改修

して、一九九七年に念願のギャラリーを開いた。まるで時間が止まったかのように、昭和の暮らしがそのまま面影を留めているまちの魅力と、梅田や茶屋町から歩いてすぐの地の利が、夢の実現に向けて宮久保さんの決断を促した。「繁華街のメインストリートよりも、路地裏で素晴らしい作品に出会えるギャラリーをつくりたかったから」。宮久保さんの夢にぴったりのまちとの運命的な出会いだった。四年後には、通りの四辻に面した隅切型の長屋に、二号店・ねこアートと手作り雑貨の店「RAKUNOMUSHI」も開いている。

出会いは新たな出会いを呼び寄せる。「楽の

虫を訪ねるアートやクラフトの作家、お客さんたちを通して、中崎町の魅力がじわりじわりとまちの外に伝わっていった。同時に、ポツリポツリ、カフェや雑貨店、古着・古道具屋、ヘアサロン、工芸工房など、長屋の空室を見つけては埋めるように、年を追うごとに新しいお店の数が増えてきたのである。

中崎町ムーブメントの基点となったアートギャラリー「楽の虫」は、お年寄りたちが静かに暮らす長屋が並ぶ、緑溢れる路地の奥にある。ひっそりとした路地の空気を乱さないように、「楽の虫」と書かれた控えめがかわいい看板が、ちょこんとぶら下がっている。

ひっそりとした路地の一角で心ときめく佇まいを楽しませてくれる服飾アトリエ「マタタビ洋服店」



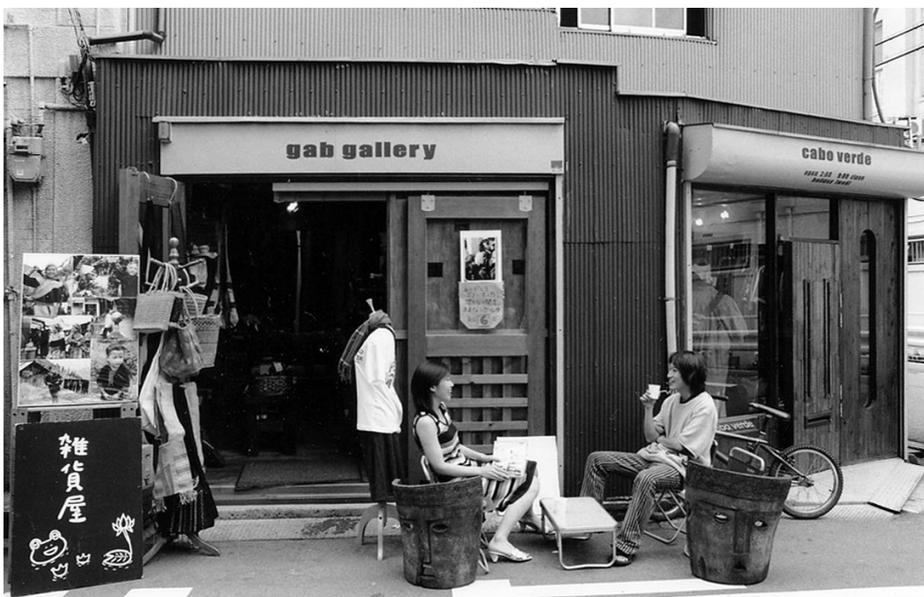
植木の水やりがてら、お向かいのお年寄りと言葉を交わす。そんな暮らしの風景の中に、アートが溶け込んでいる。「楽の虫」のお向かいには、服飾のアトリエ「マタタビ洋服店」。童話の世界にでも迷い込んだかのような、不思議な佇まいを楽しませてくれる。イマジネーションを静かに刺激する、なんとも、心ときめく路地の風景がある。

新・旧の職人文化が 息づくまち

もともと中崎町界隈は、職住一体となった職人のまちの表情を持つまちである。今もあちこちに、印刷・製本、ガラスや金網の加工など、現役の町工場を数多く見つけることができる。例えば、代表的な一軒がファクトリー・ショール「MAEDACRAFT」である。大ささまざまな木箱など、木製品の製造販売を手がけている。日本で唯一、「コカ・コーラ」の

ロゴ使用の正式承認を持ち、コカ・コーラグッズも扱っている。知る人ぞ知る一軒だ。そんなものづくりのまちの気風がなせる技かもしれない。ここ数年増えている中崎町のニューカマーたちの多くは、自らの手で何かを創り出し、生業にすることを志す、ネオ職人ともいふべき創造者とその予備軍たちである。例えば、通りに面した長屋の一角を改造し

ネオ職人とも言うべき若者たちのショップ&ギャラリー。「cabo verde」と「gab gallery」



カフェバー「菓バコ」は、等身大の懐かしさがつまった手作りの空間

た「cabo verde」。大阪発信のカジュアルなブランドアイテムやシャツやパンツのカスタムメイドを手がける、こだわりの店だ。同じ建物内に「gab gallery」を併設し、アクセサリや小物など若手作家の作品を発表する場としても活用されている。

幹線道路・都島通からほんの少し入ったあたり、一棟の長屋にユニークな三つの世界がポップと並ぶ。向かって右側に、ギャラリー&カフェ&バーの「菓バコ」。若い女性二人が、長く空き家だった一戸を借りて、コソコソと自力で改装し、小学校の机と椅子などなど、懐かしい家具を集めてつくった、文字通り菓箱のような空間だ。

カフェ「パラボラ」の2Fには、
スモールオフィスが

真ん中に、古着・リメイク・雑貨・手作りの店「かえる家」。こちらも若い女性が一人で始めた店である。「大きな会社に勤めるよりも、無理せず自分のペースで好きな服飾の仕事ができて幸せ」。店内は、広さといいデコレーションといい、まるで彼女たちの部屋そのものである。「ちょっと友達の家遊びに行くという感じで、お客さんが気軽に何度でも覗いてくれます。一度やって来た人が、次には子どもを連れてくることも」。「若い子好みの古着には、もとはお年寄り向けのワンピースやブラウスだったものもあるから、意外と近所のおばあちゃんが喜んでくれて、うれしいです。このまちならではの面白さがあります」と、くっつくのない笑顔が気持ちいい。「かえる家」の左側には、ガラス工房、ユトリ「ト」がある。女性たちがテーブルを囲み、と

んぼ玉やステンドグラスなど、手技を楽しんでいる様子がかがえる。

ユニークなカフェと雑貨店などが、わずかに百メートルほどの間に点々と並ぶ細い通りもある。カフェ「パラボラ」は、CDプレスや印刷を請け負うスモール・オフィスにカフェを併設している、ネオ職人のまちならではの組み合わせが新鮮だ。「うたたねカフェ」は、ふと立ち寄って休憩したくなるなごみ空間。地元で生まれ育った姉妹が営む手作り工房「リンドグリーン」。アクセサリー&アンティーク「gale(ガレ)」、古道具「ひょうたん屋」、カフェ&ギャラリー「PEACE MOTHER」、などなど。もちろん、面白いのはこれだけではない。うっかりすると見過ごしてしまつほど、昔ながらのまち並みに見事にまぎれ込んでいる店を、宝探しの気分で探し歩いてみるのも

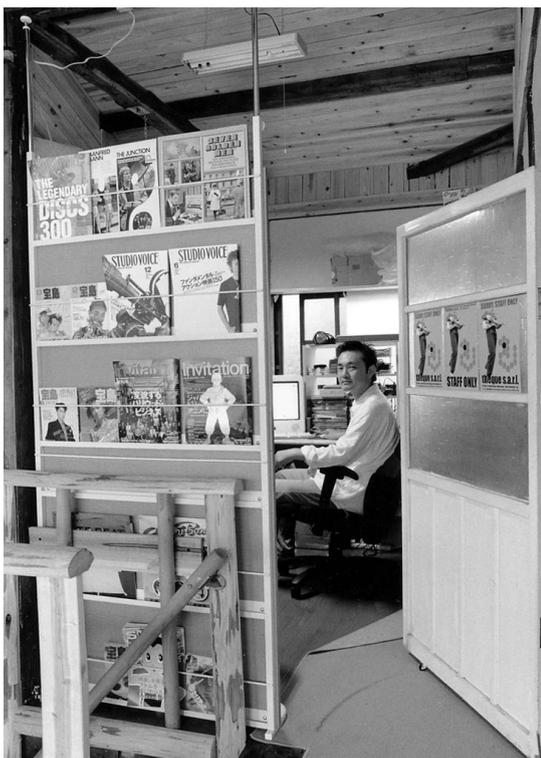
成熟社会の申し子たちが 求めるもの

楽しい。ネオ職人たちのチャレンジ・シヨップとでもいってべき手作りの店が点々と並ぶ光景が、中崎町の特徴といつていいだろう。

大阪市立大学と近畿大学の学生三人が、卒業論文・プロジェクトとして実現した「cafe」は、このまちにやってくる新世代のニューカマーたちの思いを、ある種象徴するかのような事例である。

「R cafe」を手がけた若者三人は、路地裏の小さな長屋を借りる交渉からスタートし、資金調達、改修計画・設計、そして自力の工事と、長屋再生の一連のプロセスを乗り越え、ハードの改修を成し遂げた。さらに改修後、メンバーの一人・藤井有美さんが、大学卒業後、カフェの経営を自らの生業として選択し、二〇〇三年春から営業を続けている。

彼らがWEBサイトで表明しているプロジェクトへの思いが印象的だ。「私たちは、あらゆる限界の中、育ってきました。バブルがはじけたとき、何もわからない子供でしたが、きつとその中で何かを感じていたと思います。そして、社会の限界、経済の限界、平和の限界、そして地球の限界。あらゆる限界を知っている、そして生きている世代が私たちなのです。何を残し、何を創っていかなければならないのか。それは一つの使命のように感じます。」



自宅のダイニングでくつろぐかのようなカフェ「パラボラ」



「何を残し、何を創っていかねばならないのか」。学生たちの問いかけから生まれた「R cafe」

ここで問題意識をもった一つは、住宅ストック問題です。いま、日本は年間二〇〇万件的住宅が新築されています。しかし住宅が足りないのかというと、確実にあまっています。そして、そのほとんどが建て替えます。二〇〇万件的建物を建てる代わりに二〇〇万件的家が壊されています。いろんな理由で取り壊されるので、いろいろの理由は業者にとって取り壊し、新築するほうが儲かるからです。しかし、古い家もっている何か懐かしい感じは新築で

は決して創れない空間なのです。そしてもう一つは、なにかやりたいことができる場所を提供したいということ。そういったことから、古い空家を改造してギャラリー兼カフェにしようと考えました。「R cafe」ホームページから抜粋。 <http://www.eonet.ne.jp/rcafe/>。
そこには、高度経済成長期とは明らかに異なる価値観に目覚めた、成熟社会の申し子たちの登場を実感させるコンセプトの主張がある。その思いが、長屋の再生利用という形に結実し、今、写真などの作品を展示する自己表現の場として、あるいは我に返って、静かに落ち着く場として、「R cafe」を愛する若者たちの静かな共鳴と支持の輪が広がっている。朝食サービスは、地元で暮らし・働く人たちにも好評で、外からやってくる若者から地元の人たちまで、思い思いの時を過ごす場としてまちに根を張りつつある。

自己実現の 装置としての長屋

こうした若い人たちの動きとまちの変化を、この数年じつと見つめてきた人もいる。仕事を半ばリタイアし、第二の人生の舞台にこのまちを選び、自ら長屋を改造して、設計事務所と囲炉裏のあるカフェ&ギャラリーを構えた、創思舎・創徳庵の久保昌徳さんである。「戦後働きづめに働いてきた世代は、ほっと息をつきたくなっている。若い人たちの中にも、

前世代の記憶の遺伝子が宿っていて、このまちに心の故郷のようなものを感じているんだと思います。」「終身雇用も保証されない時代になって、今の若い人たちは自分で自分の生き方を模索しなくてはいけない。まちの中にあって家賃も安い長屋は、そんな若者の成長のプロセスを引き受ける役割を果たしているんだと思います。つまり長屋が自然発生的にインキュベーションの役割を果たしているということである。

数々の若者たちの成長の物語が繰り広げられている中崎町。その中であって、ひととき特徴的な存在が、二〇〇一年にオープンした「Salon de Annatto(天人)」である。パフォーマーのJUNさんが、「日本の文化・日本のコミュニティについて、住みながら学べるところを探し歩き、たどり着いたのが中崎町。このまちに住んで、カフェをつくって寝泊まりしながら学んでいきたいと思った」と、一軒の長屋を借り、「コミを出さない改修」をコンセ



独特のセレクトで印象的な古着・雑貨が並ぶ「陽炎座」



さまざまな出会いとアクティビティが生まれるカフェ「Salon de AmanTo(天人)」

プトに、改修過程そのものをパフォーマンスとして公開。ご近所の人やクチコミで興味を持ってやってきた人たちなど、延べ一・二九人が関わる長屋再生を成し遂げたものだ。「公園のような場所をつくりたかった」と

JUNさんが語るように、誕生のプロセスの中で「天人」は、誰もに開かれた場としての性格を豊かに宿していったのだろう。集まって来る人たちが自身の発案で、カフェの片隅に、ミニFM局が開設されたり、写真用の暗室が

つくられたり、スタッフや通り返りの人やまちの人が、お互いにパソコン教室や文化教室で学びあったり、さまざまなセッションが開かれたり、「天人」から生まれる活動はそこに関わる人と出会いの数だけ無限に広がっている。小学生は、ジュース一杯まで無料。お年寄りも子どももいる中に、さまざまなジャンルのアーティストもいる、そんなソーシャル・ミックスの場づくりが志向されている。

もちろん、古くからの住人にとって、こうした若者たちの登壇にとまどいがないわけではない。暮らしの規範や生活リズムの違いからくる衝突も起こる。けれど、それに勝るまちの包容力や個々の調整力も徐々に目覚めつつある。中崎町で印刷業を営み、戦前からこのまちに住み続けてきた浅野穰一さんは、まちはクロス・カルチャー。多少の意見の違いは乗り越えて、お互いにいい意味で影響しあって成長していきたい。それが、まちを大切にすることにもつなが

る」と、このまちに引かれて集まってくる若者たちを受け止める存在だ。さらには、「都心で地べたに近いところで暮らせる価値がどれだけ大きいのか。そう思えば、今話題の超高層の六本木ヒルズよりも、水平の長屋の方がずっと豊かじゃないかと、ニューカマーたちとの交流の中で、まちへの自信も回復しつつある。

ニューカマーと オールドカマーが つくる未来は

中崎町のマンションにオフィスを設け、語学を活かしたITと人材紹介ビジネスを手がけている船津敦子さんは、都心でありながら生活の匂いの残る中崎町は、仕事への集中や刺激と、ほっと寛げる空間の両方がある、創造的な営みにもってこいの場所」と、このまちに惚れ込んだニューカマーの一人だ。暮らしの中で実際に活かしているまちのお店情報を中心に集め、シンプルなインデックスにまとめ、二〇〇〇年からiモード、なかざきちようマガジンで発信している。多言語サイトで外国人のアクセスが多いのも特徴だ。

海外の人材との豊富なネットワークを持つ船津さんは、若い創造者たちが集まる中崎町を、ニューヨークに重ね合わせて夢を描いている。「例えば、ニューヨークのアートフェアで中崎町のアーティストを紹介したり、ニューヨークのアーティストを中崎町で紹介したり、

「中崎町アートフェア」(2001年)のポスター
今年も10月に開催された



アーティストの才能を伸ばすチャンスのあるまちになるといい。中崎町は、外国人も暮らしやすい、外国に直接つながることができるまちだと思います」。

中崎町界隈の魅力と若い創造者たちの存在を多くの人に知ってもらいたいと、二〇〇一年から毎年、中崎町アートフェアも開催されている。ギャラリーや雑貨店、カフェなどを拠点にした、良質の作品展、コンサートやセールなどMAP片手にまちを歩きながら、さまざまな趣向を楽しめるイベントで、仕掛け人は前述のアートギャラリー「楽の虫」の宮久保忠広さん。

新・旧住人がいっしょにアートフェアを運営する関係も芽生えてきた。フェアをきっかけに、地元の人たちがお店やギャラリーを覗き、新しい触れ合いも生まれている。自然にお店同士の行き来も広がってきた。ニューカマーたちが個々に描いている夢は、このまちをどう変えていくのか。「何を残し何を創ってい



お年寄りと子どもたちが言葉を交わす路地の風景がある

くのか」。成熟社会の申し子たちの問いかけがいよいよリアリティを持ち始めている。

第三話の終わりに

自然発生的に、インキュベーションの役割を果たし、若者を中心とするネオ職人たちの

成長や自己実現の受け皿としての機能を担っている、中崎町の長屋再生ムーブメントを駆け足で眺めてきた。

前回の空堀同様、ここでも「手作り」、「インキュベーション」、「ソーシャル・ミックス」が、重要な鍵であることがうかがえる。これらの機能を、都市再生の必須要素として組み込むことができるかどうか、大きな課題であることが改めて認識できる。

また、中崎町の事例がリアリティを持って示していることの本质は、ニューカマーとオールドカマー、旧世代と新世代の文化が、どのようにぶつかりあい、どのように相互に刺激しあい、何を共有し、そこからいかに新たな時代の規範や文化を生み出していくことができるかという、文化創造の過程そのものでもある。

まちに暮らすという文化を涵養してきた長屋を持つ、プライベートとパブリックの共存する空間特性。その特性が、異なる価値観の出会いの場を提供し、成熟社会における都市と暮らしの新たな規範や文化の創造の現場になり得ることを物語っているともいえる。

長屋再生ムーブメントを一過性の流行現象とする見方もあるが、出来事の本質を読み取っていくことによって、単なる流行として市場の中で消費し尽くして終わらず、タフな文化へと育てあげていく視点を持っていきたい。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員)

CEL